

実習生の領域「人間関係」指導の理解

石川 洋子*

Understanding of “Human Relationships” in Student Teachers

Hiroko ISHIKAWA

要旨 実習生の領域「人間関係」に関する子どもの発達への気づきとその指導のあり方に関する理解を検討するため、質問紙調査を実施した。質問は、実習時における「人間関係」に関する子どもの発達と保育者の指導に関して、項目ごとに実践の場で見聞きし気づいたかどうか、またその発達援助のために保育者がどのような保育実践をしていたかを尋ね、自由記述されたものについて分析検討した。

調査結果より、各年齢にある子どもたちの人間関係の発達において、外側から見える言動への気づきはあるものの、子どもの意図するところや内面への気づきは難しいこと、人間関係の発達援助のための保育者の実践を読み取ることはさらに難しいことがわかった。しかし、学年差が大きいことから、経験や授業での振り返り、確認などが有効であろうことが示唆された。

実習の振り返りの時期や手立ても工夫を必要とされる。本研究のように、実習直後に項目ごとに振り返りを記述することで、より自分のものとして確認することもできるが、保育のVTRを見て、子どもの意図や内面、保育者の意図や実践を議論することも有効かもしれない。より一層丁寧な実習生指導の必要性が感じられた。

また、とくに、小学校教育とつながる項目への気づきと援助が読み取れていない。5歳児までの教育は園内で見ることができ、次のステップを見通した援助のあり方を見つめることはできるが、小学校教育の内容を見通した5歳児への援助を考えることは難しいと思われる。これは保育者にとっても同様であろう。幼保小連携の重要性を考えると、教育内容を互いに理解することやそのすり合わせをすることは、現場の教員にとっても大きな課題となっているのではないだろうか。

キーワード：人間関係 実習生 保育内容指導法 5領域 幼児教育 幼保小連携

I 研究目的

保育者養成における実習生の保育の質の向上が急務である。2017年には、幼稚園教諭養成において課程認定の改正が行われ、5領域を核として、子どもの育ちを育む専門性の向上が目指されている。2018年には、保育士養成カリキュラムも大幅な見直しが行われ、保育士の質の向上が目指されている。

本学の保育者養成においても、さまざまな授業や実習の事前事後指導などにおいて、実習生の力

を向上させる努力を行ってきた。しかし、各5領域の理解とともに、乳幼児の発達に即しながら具体的指導場面を想定し、実習生自らの保育を構想し実践に移していくことは非常に難しい。

説田¹⁾は、5領域の「人間関係」と「言葉」について、幼児教育において育みたい「資質・能力」の三つの柱と、幼児期の終わりまでに育ってほしい姿の10項目を柱として、非認知能力の育ちをキーワードとして整理・考察をしているが、発達と成長の過程においての保育は5領域全てが絡み合い保育が成り立つことを確認している。

藤崎²⁾等は、領域「人間関係」に関する理論的

*いしかわ ひろこ 文教大学教育学部心理教育課程

背景として、1.生物学的発達、2.文化・歴史的発達、3.個体発生的発達、4.微視的発生的発達の4つの視点から概観している。そしてとくに、瞬間に生きる子どもの姿から人間関係の発達を読み解き保育を構想する力について考えようとしている。学生への授業においも映像資料などを用いながら、子どもの心情を読み取り、どう援助につなげるのか、いざこぎ場面などを例にあげながらグループワークなどをしていくことを提案している。

筆者も保育内容を実習生にどう伝え理解と実践につなげていけばいいか、検討してきた。2015年³⁾には、実習生の教育課程・保育課程への理解と子ども理解に関して、子どもへの気づきと保育者の実践について「人間関係」領域を中心に調査・検討した。そこでは、「人間関係」領域である「人との関わり」の中でも外側から見えやすいものに対する実習生の気づきは高かった一方、子どもの気持ちや意図、思考やイメージといった内面を読み取ることは難しいようであった。子どもの内面をも含んだ深い理解と教育課程の先を見通した保育者の実践とを丁寧に重ね合わせていく授業の重要性を指摘した。

しかし実習生においては、保育者の実践を分析・理解していくことは、短い実習期間の中では非常に難しいことである。そこで本研究では、領域「人間関係」に焦点を当て、保育者がどのようにその指導・援助を行っていたかについて振り返り、確認する作業を調査を通して行い、その記述内容等を分析することとした。

II 研究方法

実習生の領域「人間関係」に関する子どもの発達への気づきとその指導のあり方に関する理解を検討するため、質問紙調査を実施した。

質問内容は、実習時における「人間関係」に関する子どもの発達と保育者の指導に関して、項目ごとに、実践の場で見聞きし気づいたかどうか、またその発達のために保育者がどのような援助や

実践をしていたかを自由記述で尋ねた。

研究対象は、本学教育学部心理教育課程幼児心理教育コース3年生、4年生、合計79名(表1、表2)である。経験した実習園は、表3の通りである。

調査時期は、幼稚園実習、保育所実習ともに、実習I期(2週間実習)終了後である、平成30年7月である。

表1 研究対象の人数

男性	女性	合計
1.3 (1)	98.7 (78)	100.0 (79)

表2 研究対象の学年

3年生	4年生	合計
48.1 (38)	51.9 (41)	100.0 (79)

表3 経験した園種

		% (人数)
3年生	公立幼稚園	6.3 (5)
	私立幼稚園	91.2 (72)
	私立認定こども園	2.5 (2)
	合計	100.0 (79)
4年生	公立保育所	89.7 (35)
	私立保育所	2.6 (1)
	公立認定こども園	5.1 (2)
	その他	2.6 (1)
	合計	100.0 (39)

III 結果と考察

1 0・1・2歳児の「人間関係」

(1) 「人間関係」に関する項目

実習生への調査に用いた人間関係に関する項目は、保育所保育指針等を参考にした。0・1・2歳児の人間関係に関する項目は、それぞれ以下の通りである。

① 0歳児

- 1.声をかけてもらおうと笑う
- 2.相手をしてもらおうと喜ぶ
- 3.保育者との関わりの中で情緒が安定する
- 4.特定の保育者との情緒的絆が形成される

5. 保育者からの言葉かけを喜ぶ

② 1 歳児

1. 保育者と安心して関わる
2. 周囲の子どもに関心をもち、関わろうとする
3. 言いたいことを言おうとする
4. 保育者と、もののやり取りをする
5. 他の子と、もののやり取りをする

③ 2 歳児

1. 他の子の存在に気づく
2. 他の子と楽しそうにしている
3. 保育者と一緒に簡単なごっこ遊びをする
4. 保育者に自己主張をする
5. 他の子に、自己主張をしたり、物の取り合いをする

(2) 「人間関係」の項目への気づきとその発達援助に関する記述の割合

実習生の人間関係に関する項目への気づきと、保育者の発達援助に関する記述の割合を比較しながら検討した。

① 0 歳児

保育所実習で、0 歳児クラスに入った者の割合は、全体の 58.5% (24 名) であった。図 1 は、0 歳児における人間関係の項目への気づきとその発達援助に関して記述された割合を見たものである。人間関係に関する項目で高い割合で気づかれた項目は、「相手をしてもらうと喜ぶ」「声をかけてもらうと笑う」「保育者と関わり情緒が安定する」であり、100～83%の者に気づかれていた。「保育者からの言葉かけを喜ぶ」「特定の保育者と情緒的絆が形成される」の項目は、67～58%が気づいた結果であった。

一方、これらの項目の中で、その発達援助のために行われていた保育者の実践内容を記述していた者はほぼ同数であったが、「保育者からの言葉かけを喜ぶ」ようになるための実践を記述した者は 46%と、少し数値が下がっていた。

② 1 歳児

実習で 1 歳児クラスに入った者の割合は、

95.1% (39 名) であった。

図 2 は、1 歳児における人間関係の項目への気づきとその発達援助に関して記述された割合を見たものである。1 歳児の人間関係に関する項目で高い割合で気づかれた項目は、「保育者と安心して関わる」「保育者と物のやり取りをする」「周囲の子どもに関わろうとする」「言いたいことを言おうとする」であり、87～69%の者に気づかれていた。「他の子と物のやり取りをする」は、56%と、少し気づかれた割合が下がっていた。

一方、これらの項目の中で、その発達援助のために行われていた内容を記述していた者は、0 歳児と同様ほぼ同数であった。

③ 2 歳児

実習で 2 歳児クラスに入った者の割合は 100%であり、全員が保育所の 2 歳児クラスに入っていた。

図 3 は、2 歳児における人間関係の項目への気づきとその発達援助に関して記述された割合を見たものである。2 歳児の人間関係に関するすべての項目で、85～68%の高い割合で気づかれていた。気づかれた項目は、「他の子と物の取り合いをする」「保育者に自己主張する」「他の子の存在に気づく」「他の子と楽しそうにしている」「保育者とごっこ遊びをする」であり、人間関係に関しては 2 歳児らしい言動にはほとんどの実習生が気が付いていた。

これら人間関係の項目への気づきがある一方、その発達援助のために行われていた内容を記述していた者が下がっていた項目があった。「他の子と楽しそうにしている」が気づきが 71%であるのに対して援助の記述は 32%であり、T 検定で、0.1%水準で有意差があった ($p < .001$)。また、「保育者に自己主張する」「保育者とごっこ遊びをする」項目でもそれぞれ有意差が見られた ($p < .05$)。2 歳児は他の子どもや保育者との関わりが増える年齢であり、実習生はそのことへの気づきはあるものの、そのための保育者の保育や発達援助については記述できないという結果であった。

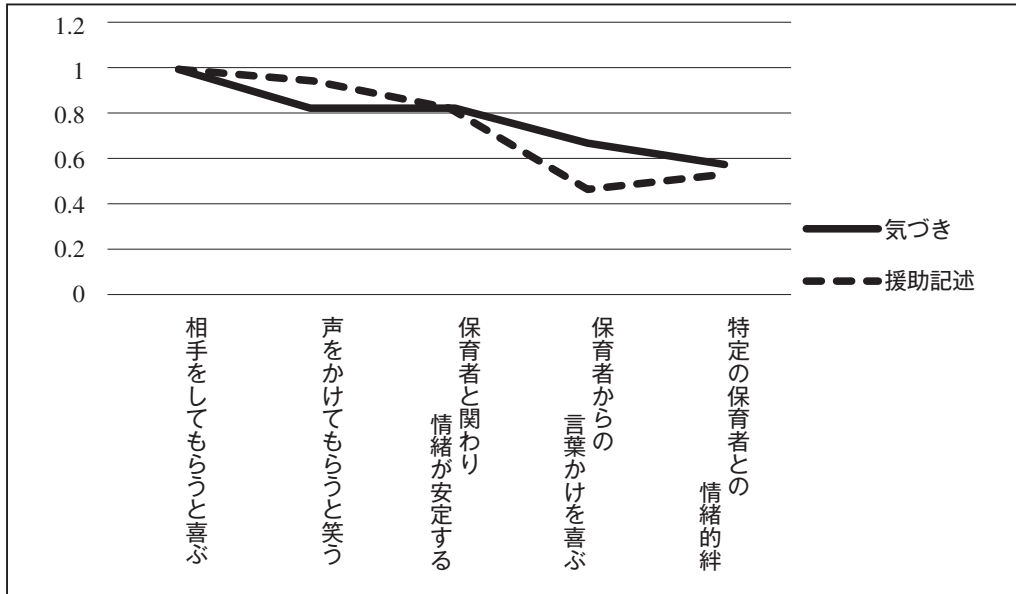


図1 0歳児・人間関係への気づきとその発達援助の記述割合

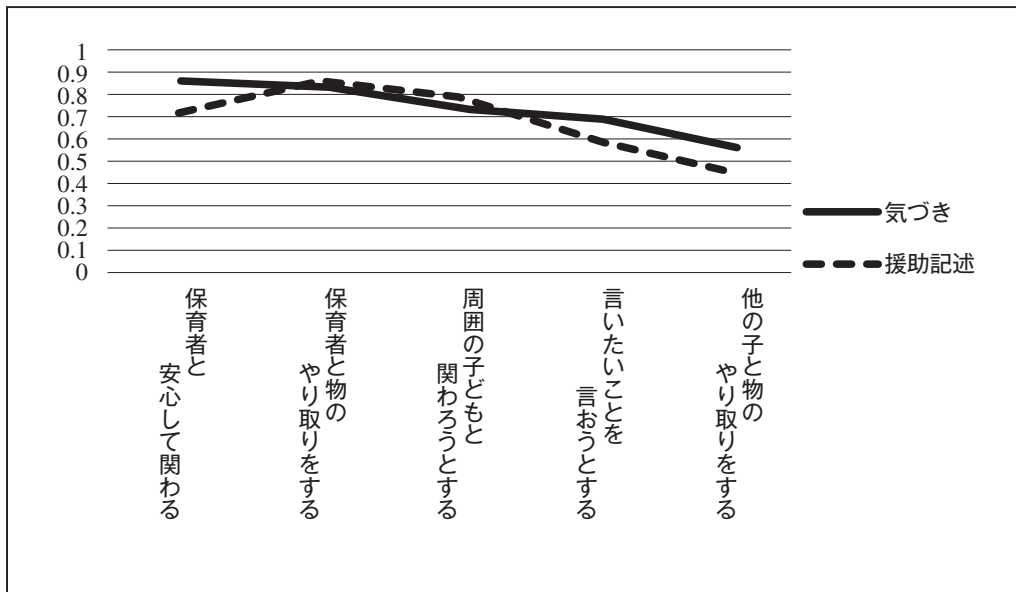
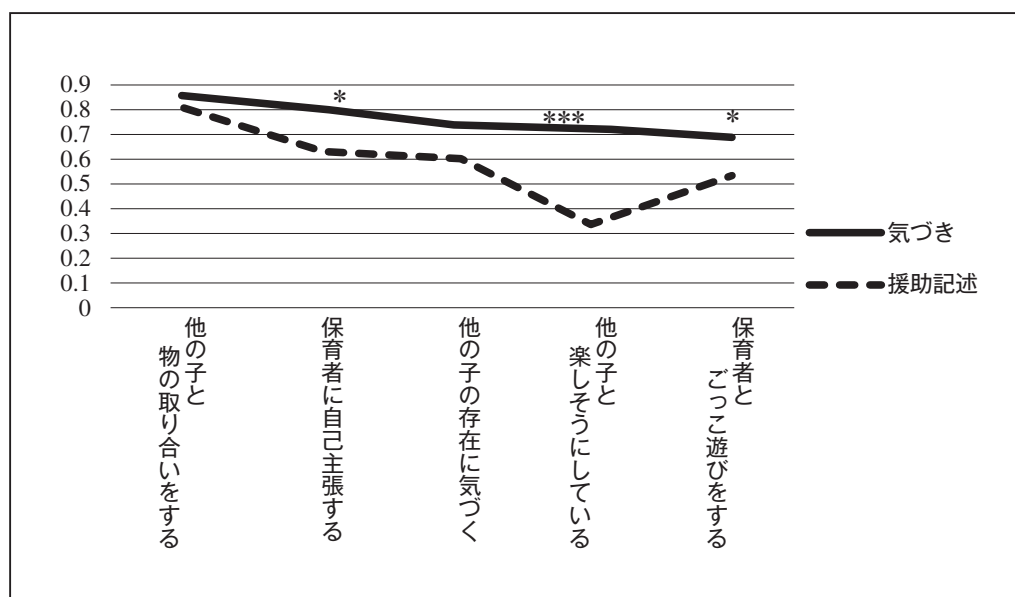


図2 1歳児・人間関係への気づきとその発達援助の記述割合



*** $p < .001$ * $p < .05$

図3 2歳児・人間関係への気づきとその発達援助の記述割合

2 3・4・5歳児の「人間関係」

(1) 「人間関係」に関する項目

3・4・5歳児の子どもの発達に関する項目は、幼稚園教育要領、保育所保育指針等を参考にし、それぞれ以下の通りとした。

① 3歳児

1. 好きな遊びが見つかる
2. 他の子と一緒にいたり、一緒に遊んだりすることを楽しむ
3. 他の子と、平行遊びをする
4. 他の子に、自己主張をする
5. 他の子と言い合いになったり、物の取り合いになったりすると、保育者に言いにくる
6. 少し我慢したり、順番を待ったりする

② 4歳児

1. おもちゃや遊びなどを介して他の子と関わる
2. 他の子とやり取りをする関わりがもててくる
3. 仲の良い友だちができ、一緒に遊ぶようになる
4. 友だちとのつながりを広げようとする
5. 互いに主張することでけんかが多くなり、葛藤も経験する

6. 他の子の気持ち、動き、考えが見えるようになる
7. 自分の気持ちを抑えたり、我慢ができるようになる
8. 「自分は～だけど、今は〇〇しよう」といった自己統制が出てくる
9. 決まりに気づき、守ろうとする

③ 5歳児

1. 仲間と共に活発に遊ぶ
2. 遊びの集団やグループが大きくなる
3. クラス全体の活動を楽しむ
4. 目的をもって集団で行動する
5. 新しい人間関係を作る
6. 問題を自分たちで考えて解決しようとする
7. 相手を許す、異なる考えを認め合う
8. 他人の役に立つことを喜ぶ

6歳児

1. 仲間の一人としての自覚をもつ
2. 自分たちで役割分担をする
3. 友だちのよさを認め合う
4. クラスやグループの課題を自分のこととして受け止め、折り合いをつけながら活動する

(2) 「人間関係」の項目への気づきとその発達援助に関する記述の割合

実習生の人間関係に関する項目への気づきと、保育者の発達援助に関する記述の割合を比較しながら検討した。

① 3歳児

図4は、3歳児における人間関係の項目への気づきとその発達援助に関して記述された割合を見たものである。3歳児の人間関係に関する「我慢や順番待ちを少しできる」「他の子と遊ぶことを楽しむ」「好きな遊びが見つかる」「他の子に自己主張する」の項目で、76～63%の高い割合で気づかれていた。「トラブルを言いに来る」「他の子と並行遊びをする」の項目も約半数の者に気づかれていた。

一方、その発達援助のために行われていた内容を記述していた者の割合は、下がっている傾向があった。「他の子と遊ぶことを楽しむ」「他の子と並行遊びをする」「他の子に自己主張する」は、 T 検定で、有意に記述の割合が下がっていた。 $(p < .001, p < .001, p < .05)$ 。

3歳児において、実習生は人間関係に関する子どもの状態に気づきはあるものの、その発達援助のために保育者がどんなことをしているのか、または保育者のどの言動がこの発達につながっているのかは理解できないという結果であった。

② 4歳児

図5は、4歳児における人間関係の項目への気づきとその発達援助に関して記述された割合を見たものである。「決まりに気づき守ろうとする」「けんかが多くなり葛藤も経験する」「遊びを介して他の子と関わる」「仲のよい友と一緒に遊ぶ」までの項目は、72～63%以上の者に気づかれていたが、「他の子とやりとりをする」「他の子の気持ちが見えるようになる」「自分の気持ちを抑える」「友だちとのつながりを広げようとする」「自己統制が出てくる」の項目への気づきは、59～30%と、

あまり多くの実習生には気づかれていない結果であった。項目をみると、子どもの意図や内面に関するものが多い。実習生にとり、外側から見ることのできない子どもの内面を推し測ることは難しいようである。

また一方、その具体的な援助に関する記述は、 T 検定で、ほとんどの項目で有意に低くなっていた $(p < .001, p < .001, p < .001, p < .001, p < .001, p < .001, p < .05, p < .001)$ 。3歳児と同様に4歳児でも、「人間関係」発達のために、保育者がどんな援助をしていたかについての記述が低く、実習生には見えにくいという結果であった。

③ 5歳児

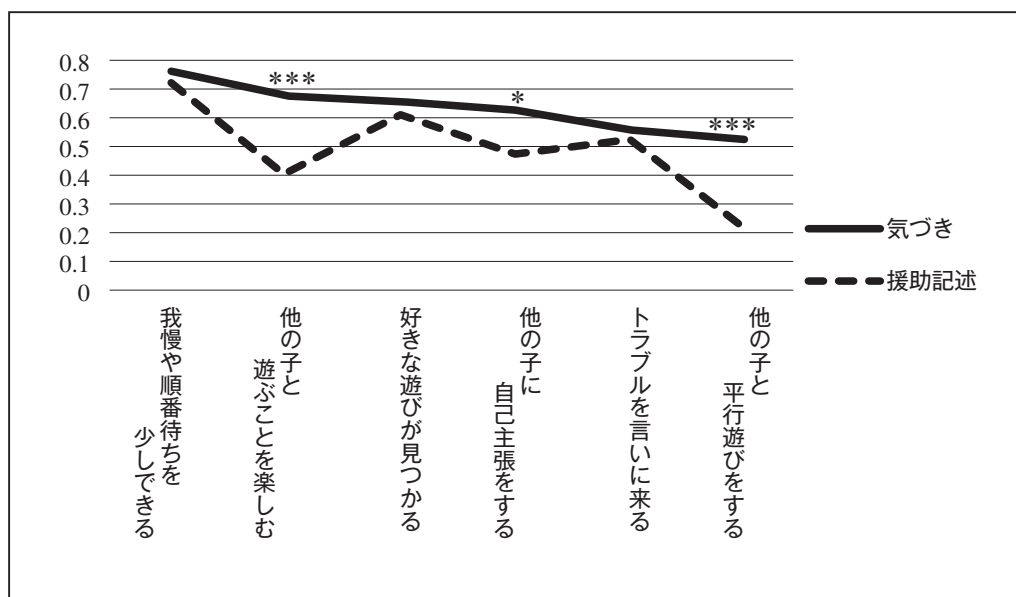
図6は、5・6歳児における人間関係の項目への気づきとその発達援助に関して記述された割合を見たものである。「仲間と活発に遊ぶ」「他人の役に立つことを喜ぶ」「クラスの活動を楽しむ」「問題を自分たちで解決しようとする」までの項目への気づきは、72～62%の者に気づかれていた。しかし、「遊びの集団が大きくなる」「目的を持ち集団で行動する」「相手を許す」「自分たちで役割分担する」「新しい人間関係を作る」「課題を折り合いをつけながら活動する」等の項目に気づいた者は、54～13%と数値が低くなっていた。これらの項目は6歳児に該当するものもあり、6月という実習時期や実習期間自体の長さの影響も考えられる。

一方、5・6歳児の項目への気づきの低さにも増して、これらの発達のための具体的な援助に関する記述も T 検定で、ほとんどの項目で有意に低くなっていた $(p < .001, p < .001, p < .001, p < .001, p < .001, p < .001, p < .001, p < .001, p < .001)$ 。

実習生は、人間関係に関する事項である、我慢ができる、決まりに気づく、仲間と活発に遊ぶなど、外側から見えやすい行動についてはよく気づいているが、内面的なことや人間関係を広げようとする子ども自身の言動や保育者の工夫、援助については、読み取りにくく、理解もしにくいとい

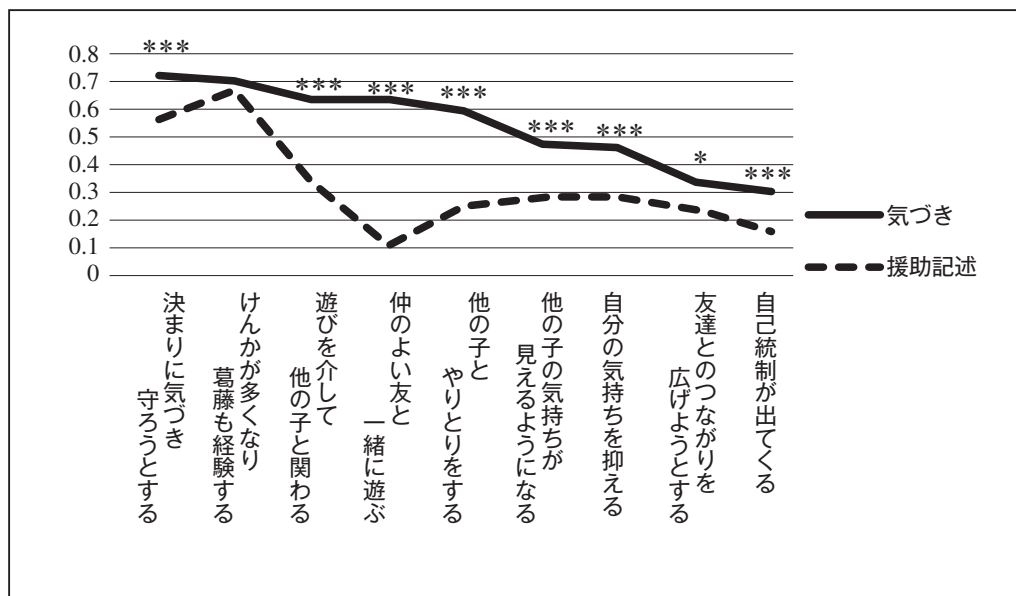
う結果であった。とくに、小学校教育とつながる「課題を仲間と折り合いをつけて活動する」項目への気づきと援助を読み取れていない。調査時期の問題もあろうが、細やかな援助が、小学校教育の学びへとつながっていくことをもっと意識する必要があろう。

実習期間は短期間であり、保育者の発達援助までは読み取りにくいかもしれないが、小学校をも見通したさまざまな人間関係の変化にもっと注目することで、保育者の援助も見極められるかもしれない。



*** p <.001 * p <.05

図4 3歳児・人間関係への気づきとその発達援助の記述割合



*** p <.001 * p <.05

図5 4歳児・人間関係への気づきとその発達援助の記述割合

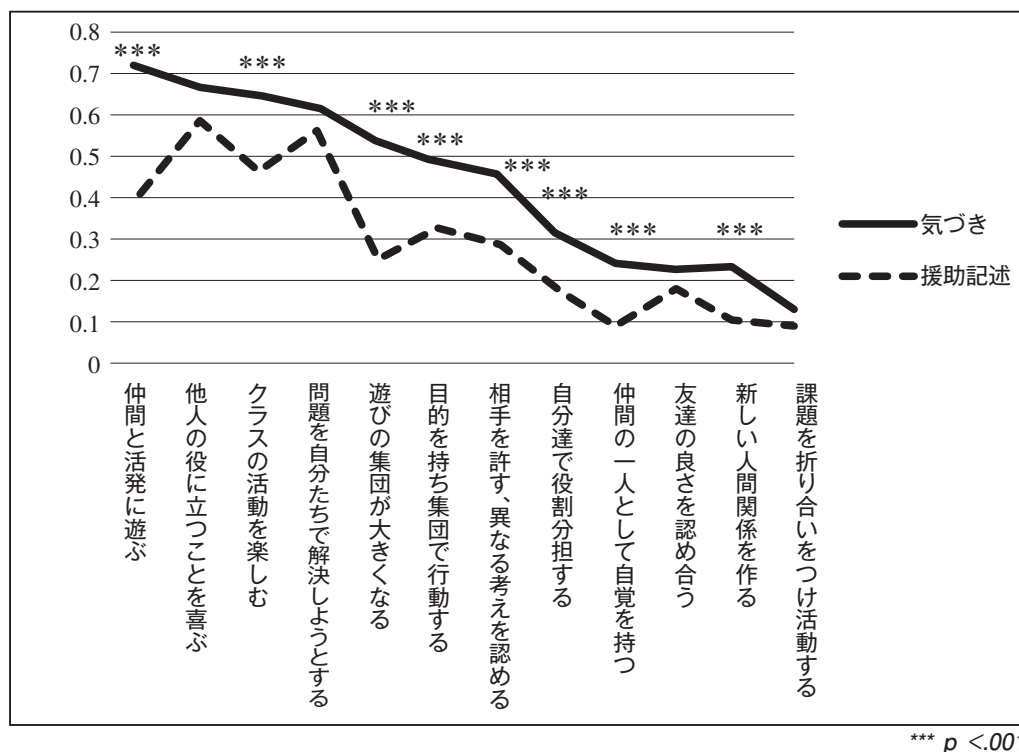


図6 5歳児・人間関係への気づきとその発達援助の記述割合

(3) 「人間関係」の発達援助の記述割合と学年差

子どもの人間関係形成のための発達援助に関する記述の割合を、学年差の面から検討した。

① 3歳児

3歳児の発達援助に関する記述の割合を学年別に見ると、多くの項目で学年差が見られ、3年生よりも4年生に記述割合が多いという結果であった。表4は、3歳児における人間関係の項目「好きな遊びが見つかる」の発達のための援助として記述された割合と学年差であるが、検定で有意差が出ており ($F = 6.935, p < .05$)、経験が多い4年生の方が、3歳児の人間関係の援助のための保育実践をよく記述していた。

② 4歳児

4歳児の発達援助に関する記述の割合を学年別に見ると、やはり多くの項目で学年差がみられ、3年生よりも4年生に記述割合が多いという結果であった。表5は、4歳児における人間関係の項目「自分の気持ちを抑えたり我慢ができる」の記

述割合と学年差である。発達のための援助として記述された割合の学年差は検定で有意差が出ており ($F = 6.651, p < .05$)、やはり経験が多い4年生の方が、4歳児の人間関係の援助の保育実践をよく記述していた。

③ 5歳児

5歳児の発達援助に関する記述の割合を学年別に見ても、やはり多くの項目で学年差が見られ、3年生よりも4年生に記述割合が多いという結果であった。表6は、5歳児における人間関係の項目「自分たちで役割分担をする」の記述割合と学年差である。発達のための援助として記述された割合の学年差は検定で有意差が出ており ($F = 5.035, p < .05$)、やはり経験が多い4年生の方が、5歳児の人間関係の援助の保育実践をよく記述していた。

子どものどの年齢を見ても3年生よりも4年生で保育者の発達援助の実践について多く記述されており、実習経験や授業の深度に応じて、子ども

の発達を見通し、保育者の保育を深く見る力がついているという結果であった。

表4 3歳・援助記述の割合と学年差
＜好きな遊びが見つかる＞

	平均値	N	SD	F 値	
3年生	0.42	38	.500	6.935	*
4年生	0.78	41	.690		

* $p < .05$

表5 4歳・援助記述の割合と学年差
＜自分の気持ちを抑えたり我慢ができる＞

	平均値	N	SD	F 値	
3年生	0.13	38	.343	6.651	*
4年生	0.41	41	.591		

* $p < .05$

表6 5歳・援助記述の割合と学年差
＜自分たちで役割分担をする＞

	平均値	N	SD	F 値	
3年生	0.08	38	.273	5.035	*
4年生	0.27	41	.449		

* $p < .05$

(4) 「人間関係」の発達援助として記述された内容

人間関係の発達援助として、実習生は、保育者がどんな保育をしていると記述したのか、その内容を見ていきたい。

表7、表8、表9は、3歳児の人間関係に関する項目「他の子と一緒にいたり遊んだりすることを楽しむ」、4歳児の「他の子の気持ち、動き、考えが見えるようになる」、5歳児の「問題を自分たちで考えて解決しようとする」の発達のために、保育者が行っている援助の記述内容である。それぞれ実習生の学年別に記載した。

3歳児では、他の子と楽しむ遊びを広げるため、遊びの設定や工夫、子どもへの声かけ、一緒に遊びに入るなどをして、3歳児が他の子との関わりを広げられるよう援助しているとしていた。遊びを工夫して設定しているという記述が4年生に多かった。

4歳児では、他の子の気持ちへの理解の援助の

ため、相手の気持ちを考えられるよう声かけをしたり、できた子をほめたりみんなの前で認めたりするとしていた。4年生の方には、さまざまな手立てが記述されていたが、3年生では一種類であった。4歳児は他児との関わりを考えるようになるターニングポイントとも言われるが、そのための援助の保育実践というものは、理解は難しいのかもしれない。

5歳児では、問題を自分たちで考えて解決できるようになるため、声をかけたり話をさせる機会を作ったりするとしていた。見守るという回答も増えており、年長児への対応の特徴が出ていた。5歳児の援助の内容については、あまり学年差は出ていないが、どちらの学年でも小学校以降の学びへとつながる「考えること」を重視したり「話をさせる機会を作る」といったことは、一部の学生が記述をしていた。幼保小のつながりを意識した教育が模索されている中、これらの事項への気づきや援助のあり方は、今後重要になってくると思われる。

表7 3歳児への発達援助（複数回答）

他の子と一緒にいたり遊んだりすることを楽しむ	
4年生	・遊びの設定 (8) ・声をかける (7) ・一緒に遊びに入る、援助する (5) ・環境の設定 (2) ・達成感を大切にす (1)
3年生	・遊びの設定 (1) ・声をかける (7) ・一緒に遊びに入る、援助する (2) ・環境の設定 (1) ・見守る (1)

表8 4歳児への発達援助（複数回答）

他の子の気持ち、動き、考えが見えるようになる	
4年生	・相手の気持ちを考えられるよう声かけ (7) ・できた子をほめる、みんなの前で認める (3) ・子ども自身の考えを話させる、認める (2) ・幼児の気持ちを代弁 (1) ・積極的に問いかける (1)
3年生	・相手の気持ちを考えられるよう声かけ (6)

表9 5歳児への発達援助（複数回答）

問題を自分たちで考えて解決しようとする	
4年生	<ul style="list-style-type: none"> ・考えようと声をかける (14) ・見守る (6) ・話をさせる機会をつくる (3) ・妥協点を見つける, アドバイス (2) ・その他 (1)
3年生	<ul style="list-style-type: none"> ・考えようと声をかける (7) ・見守る (4) ・話をさせる機会をつくる (3) ・仲直りの声かけ, 手伝う (1)

本研究を通して、実習生には、各年齢にある子どもたちの人間関係の発達に関して、外側から見える言動への気づきはあるものの、子どもの意図するところや内面への気づきは難しいこと、人間関係の発達援助のための保育者の実践を読み取ることがさらに難しいことがわかった。しかし、学年差が大きいことから、経験や授業での振り返りや確認などが有効であろうことが示唆された。振り返りの時期や手立ても工夫を必要とされよう。

本研究のように、実習直後に項目ごとに振り返りを記述することで、より自分のものとして確認することもできるであろうが、保育のVTRを見て、子どもの意図や内面、保育者の意図や対応を議論することも有効かもしれない。より一層丁寧な実習生指導の必要性が感じられた。

また、小学校教育とつながる「課題を仲間と折り合いをつけて活動する」項目などへの気づきと援助は読み取れていない。5歳児までの教育は園内で見ることができ、実習生は、次のステップを見通した援助のあり方を見ることはできるが、小学校教育の内容を見通した5歳児への援助を考えることはとくに難しいであろう。そしてこれは、実習生ばかりでなく、保育者にとっても同様であろう。幼保小連携の重要性を考えると、教育内容を互いに理解することやそのすり合わせをすることは、現場の教員にとっても大きな課題ではないだろうか。現在の保育が、小学校教育の学びへとつながっていくことをもっと意識する必要がある。

IVまとめ

実習生の領域「人間関係」に関する子どもの発達への気づきとその指導のあり方に関する理解を検討するため、質問紙調査を実施した。質問は、実習時における「人間関係」に関する子どもの発達と保育者の指導に関して、項目ごとに実践の場で見聞きし気づいたかどうか、またその発達援助のために保育者がどのような実践をしていたかを尋ね自由記述されたものについて分析検討した。

研究対象は、本学教育学部心理教育課程幼児心理教育コース3年生、4年生、合計79名である。調査時期は、平成30年7月である。

調査結果より、各年齢にある子どもたちの人間関係の発達に関して、外側から見える言動への気づきはあるものの、子どもの意図するところや内面への気づきは難しいこと、人間関係の発達援助のための保育者の実践を読み取ることがさらに難しいことがわかった。しかし、学年差が大きいことから、経験や授業での振り返りや確認などが有効であろうことが示唆された。振り返りの時期や手立ても工夫を必要とされよう。

本研究のように、実習直後に項目ごとに振り返りを記述することで、より自分のものとして確認することもできるが、保育のVTRを見て、子どもの意図や内面、保育者の意図や実践を議論することも有効かもしれない。より一層丁寧な実習生指導の必要性が感じられた。

また、小学校教育とつながる「課題を仲間と折り合いをつけて活動する」項目などへの気づきと援助が読み取れていない。5歳児までの教育は園内で見ることができ、次のステップを見通した援助のあり方を見つめることはできるが、小学校教育の内容を見通した5歳児への援助を考えることはとくに難しいと思われる。これは実習生ばかりでなく、保育者にとっても同様であろう。幼保小連携の重要性を考えると、教育内容を互いに理解することやそのすり合わせをすることは、現場の教員にとっても大きな課題となっているのではないだろうか。

注

- 1) 説田ひとみ, 乳幼児期の「人間関係」・「言葉」について－3法令から見る5領域の「人間関係」・「言葉」を読み取る－名古屋経営短期大学紀要, 59, 23-38, 2018
- 2) 藤崎亜由子・宮下俊也, 横山真貴子, 教員養成における幼稚園5領域科目の内容構成(2)－「人間関係」に関わる教育内容研究知見に依拠して一次世代教員養成センター研究紀要, 4, 239-245, 2018
- 3) 石川洋子, 実習生の教育課程・保育課程の理解と子ども理解－「人間関係」に関わる事項を中心として－文教大学教育学部紀要, 第49集, 53-60, 2015

参考文献

- 幼稚園教育要領, 文部科学省, 2017
保育所保育指針, 厚生労働省, 2017
秋田喜代美監修, 山邊昭則, 多賀巖太郎編「あらゆる学問は保育につながる」発達保育実践政策学の挑戦, 東京大学出版会, 2016
岸井慶子「見えてくる子どもの世界, ビデオ記録を通して保育の魅力を探る」ミネルヴァ書房, 2013
鯨岡峻「エピソード記述入門, 実践と質的研究のために」東京大学出版会, 2010
無藤隆「共同するからだことば」金子書房, 2003
矢野智司「意味が躍動する生とは何か, 遊ぶ子どもの人間学」世織書房, 2006